

BLな小話 流れ星



招木かざ

「お前さあ、彼女のところとか、行かなくていいの？」

「彼女、いないし」

「もてるのに？ 二組の長谷川に告られたって、噂は？」

「好みじゃないから、断った」

おれは、おれの部屋に転がり込んで、漫画なんぞを読んでいる田村に声を掛けた。

「西田こそ、俺がこうして、ここに居たら邪魔か？ ひょっとして、彼女を連れ込もうとか計画していた？」

「そりゃ、おれに対する嫌味か」

おれは自分の外見を思い描く。顔は悪くないほうだと思う。が、おれは背が低く、体格もひ弱で、やたらと女に間違われる。対する田村は、背も高く、体つきもがっしりしている。中学時代、陸上部のエースだったとか。おれとは大違いだ。

おれは、改めて田村を見た。だらりと寝そべって、持参したポテチをつまみつつ、漫画を読んでいる。

妙なことになった。おれは再度、田村に聞いた。

「田村、ほんとに、こんな所に居ていいのか？ 世界が、終わるかもしれないのに」

それは、いつの間にか広まった噂だった。

もうすぐ、星が落ちてくる。

その星の衝撃で、人類は滅亡する。

噂の元になったのは、インドだかどこかの古文書に載っていた予言らしい。

ノストラダムス並の胡散臭い話だ。

だが二ヶ月前、NASAだかどこかのエライ機関が、地球の側を隕石が飛んでいく、と発表した。

その機関の話では、あくまで地球の側を通過するだけで、衝突したりはしないと強調していたが、世界は終末ムード一色に染まった。

新興宗教の指導者とやらは「悔いあらためよ」と叫び、将来を悲観した人間がビルから投身自殺を図ろうとして、駆けつけた警官に説得されたり、自暴自棄になった人間が略奪・強盗を働いて社会問題になったり。大騒ぎだ。

そんな大騒ぎの中、おれの通う学校でも、異変が起きた。

学校に通学する生徒の数が減っている。

登校しなくなったやつの言うには、最後は自分のやりたいことをやって死にたい、とのこと。

確かに、本当に隕石がぶつかるなら、学校に通っている場合じゃないだろう。

趣味に打ち込むもよし、

愛する人と、最後の日々を過ごすもよし。

むしろ、そうすることが自然だろう。

——本当に、世界が終わるなら。

おれは、世界が終わるとは思えなかった。

政府の「隕石は衝突しません」という報道を、世間の半分くらいの人は嘘だと決めつけているが、おれには嘘だと思えない。

本当に隕石が落ちるなら、最初から隕石のことなんか報道しなければいいんだ。そうすれば余計な混乱は起きない。

今、世間は不安定な状態だ。終末が来ると思っている人と、そんなことは起きないと思っている人と、温度差があって日常と非日常がごっちゃになっているのだ。

だから、終末を信じてない人が店を営業していると、終末を信じている人に商品を略奪されたりする。

学校では、ちゃんと出席しろと教師が言っても、生徒は出席しない。

一般の会社でも、同じような現象が起きているらしい。

おれは終末を信じていない。隕石はぶつからないと思っている。

でも、そう思うのは、おれのクラスでは少数派だった。隕石が最接近する日が近づくにつれて、クラスメイトはひとり、ふたりと減っていき——気がついたら、教室で授業を受けているのはおれと田村だけになっていた。

「西田は、終末、信じてたのか？」

「信じてない」

「なら、いいじゃないか」

「気になるだろ。二ヶ月前は、ほとんど喋ったことなかったじゃないか。今日も、突然、おれの部屋にあがりたいたなんて」

田村はむくり、と起き上がった。

「俺は、終末を信じていない。でも、それは怖いからだ。怖いから信じたくない。ガキの発想だな」

そして、田村はおれを見る。

「西田はそうじゃないだろ。頭っから信じていないだろ。俺は、西田の、そういう強いところに憧れる」

何を言い出すのだ、この男は。

「俺が、西田のこと、好きだって言ったら、どうする？ 心の強い美人が、俺の好みなんだ。だから、最後は西田の側にいたいと思った」

田村は同性愛者だったのか？

「西田は、男は駄目か？ どうしても？」

「駄目もなにも、おれは田村のことを知らなさすぎる」

おれは田村に言い聞かせる。

「恋愛ってのは、相手のこと、よく知らないと」

「今夜、隕石がぶつかったら、知り合う時間なんてないじゃないか」

「ぶつからないよ」

おれは田村に近づいた。隣に座る。

「これから、一緒に、流れ星に願いをかけよう。お互いのこと、よく知り合えますように、と」

「西田？」

「さっき、気になるって、言っただろ。好意を持ちつつある相手が、自分の部屋に転がり込んできたら、質問したくなる。そして、その人物が、おれのこと好きだなんて言い出したら、相手のことがもっと知りたくなる」

「……」

「隕石はぶつからない。おれたちは恋愛するんだ。……怖くないだろ」

「ああ」

田村の腕が、おれの肩にまわされる。おれは、自分の身体を田村に預けた。

翌日。世界は終わらなかった。

それはそれで、大混乱を招いたわけだが——おれは恋人を手に入れて、それなりに楽しく学校に行っている。

BLな小話 流れ星

<http://p.booklog.jp/book/64960>

著者：招木かざ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotoji/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64960>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64960>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ